

# ユング心理学からみる動物と関わる意味

脇本真衣（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：自己、たましい、関係性の喪失、アニマルセラピー

## 序論

動物を愛する人々は、主に「コンパニオン・アニマル」ともいわれる犬や猫に対して、人間の精神的な部分に働きかけてくる不思議な力を感じたことがあるのではないだろうか。

本論文では、無意識の領域に注目していたスイスの精神科医・心理学者であったカール・グスタフ・ユング(1875-1961)に着目し、人間が精神的困難を抱える時、アニマルセラピーなどにおける動物との関わりがどのような意味を持ちうるのかを明らかにすることを目的とし、検討していく。

## 第一章 ユング心理学における自己

ユングは、人間の心には、表層から順に、意識、個人的無意識、普遍的無意識という3つの層があると考え、自分らしく生きる上で重要な「自己」の概念を考えた。

### 第一節 意識と無意識

#### 1) 意識

意識体系の中心を成すものは、人間が日常生活で様々な判断をする際に働く自我である。しかし、意識は自我と相容れぬものを無意識下に抑圧する傾向がある。

#### 2) 個人的無意識

個人的無意識とは、①意識内容が強度を失って忘れられたり、意識が回避（抑圧）した内容であるか、②意識に達するほどの強さを持っていないが何らかの方法で心の内に残された感覚的な痕跡の内容である。こうした多くの心的内容が同一感情により一つに結びついた集合をコンプレックスという。ユングはこれを、自我の統合性を乱すものと考え、さらに普遍的無意識にある元型との結びつきを認めた。

#### 3) 普遍的無意識（集合的無意識）

普遍的無意識は、個人的な経験や考え方を超えて、人類全体にある普遍的な層である。祖先から受け継いだ神話的なモチーフや形象である元型から成り立ち、これらはメルヘンワールドや夢などのイメージに現れる心像や観念の源でもある。「太母」、「ペルソナ」、「影」などが例として挙げられる。

ユングは、元型を基にして現れる夢や空想における心像や、コンプレックスなどを通して、その背後にある元型を認識する重要性を説いた。例えば、自分の影を投影した反対の性格を持つ人物と対話する中で、その人物の中に肯定的な部分を

見出すことは、コンプレックスを自我の中に統合してゆく情動的な経験になる可能性がある。このようにユングは、治療者と患者、個人対個人の「対話」による交流を重要視した。

## 第二節 自己

### 1) 自己

「自己」は、心の全体性、同時にその中心として、意識と無意識とを統合する機能を果たす。

### 2) 個性化の過程

意識体系には、より高次の全体性、つまり自己へと志向する傾向がある。ユングは、こうした人格発展に関わる過程を、個性化の過程（自己実現の過程）と呼び、人生究極の目的と考えた。

自己実現は内的・主観的な統合の過程と、客観的關係の過程の両方にて達成される。つまり、自己内部での統合が達成されるには、他人との関係やその変化が必要なのである。

### 3) 共時性（同時性）

ユングは、ある個人の自我が自己と対決すべき時（自己実現の時）が到来したとき、内界の心的事象と呼応する外的事象（神経症や人間関係の問題、予知夢など）が起こると考えた。共時性の原理は、こうした「意味のある偶然の一致」である非因果的な現象を把握するものである。

ユング派の河合はティリッヒにならぬ、量的に測定できる時（クロノス）だけでなく、精神変化として一つの節目を迎える主観的な時間（カイロス）を逃さず大切にすることによって自己実現の道は開かれると考えた。

## 第二章 人間の全体性の回復において動物が持つ意義

### 第一節 ユング心理学からみたメルヘンワールドにおける動物

メルヘンワールドには、自我を象徴する人間の主人公に対して、動物が無意識を象徴し、個性化の過程に関わる話が多くある。そこでの動物の姿には、かつて野生動物を身近に感じていた人間が抱いたイメージが反映されている。

森によれば、例えば昔話『桃太郎』に登場する犬、サル、キジの三種の動物は、それぞれ忠義心、知恵、勇気を象徴しており、これは桃太郎が身につけるべき三つの資質であったという。鬼退治から帰り英雄として迎えられたシナリオから、

桃太郎がそれら三つの資質を取り込み、人格的に成長した様子が象徴されている。また、ペロウ童話『長靴をはいた猫』で、猫は知恵と機転を働かせ、元型トリックスター（新たな秩序を作る英雄）として主人公を導いている。

## 第二節 たましい、動物と人間

河合によると「たましい」とは、心と体を全体して一個の生命ある存在にならしめる高次元の存在である（これは自己とほぼ同様のものである）。近代以降、強い自我により形成された科学至上主義により生活の至便性は向上したが、その副作用として、意識-無意識、心-体の関係が切断され、その人らしい生き方を実現する基盤ともいえる「たましい」と切れてしまう「たましいの喪失」、「関係性の喪失」が起こった。それによる人間関係の希薄化も問題となっている。ユング心理学の立場では、関係性の回復のためには、たましいの働きに耳を傾ける作業が有効である。

では、動物は関係性の回復においてどのような働きをするのか。河合によると、身近な存在でありながら捉えどころのないたましいのイメージが、ペットなどの動物に重なることで、「たましいの顕現」になりやすいという。つまり、自己の象徴的表現として動物が存在するのである。他人との関係性に悩み、絆を感じられない人でも、動物に対しては深い愛着や絆を感じる人が多いのは、非言語コミュニケーションにより関係が構築される心地よさも関係している可能性がある。

## 第三節 脳化社会における動物

養老・的場によると、そもそも人間と動物の関わりの根本には、科学的なものではなく、不可知なものに対する畏敬の念から始まる関わりが存在していたという。そのため、概念的な世界で生きる人間が、感覚的世界で生きる動物を理解できるときは、共鳴できたときであるという。これは、自然に対してだけでなく、動物、さらにこれまで述べてきたたましいとの関わり方に通ずるものではないだろうか。

## 第三章 現代における人と動物

### 第一節 現在のアニマルセラピーの歴史と現状

アニマルセラピー（AT）は、心身ケアを目的として行う動物介在療法と、触れ合いを目的とする動物介在活動を総称したものであり、医学において置き去りにされがちな補完代替医療の一環とも位置付けられている。

### 第二節 アニマルセラピーの効果

効果の測定には、客観的評価方法よりも、質問紙調査や問診などによる主観的評価方法が主流である。ここでは、ユング心理学の立場から動物の治療的意味を捉えるために、以下では具体的な事例、効果を検討する。

村瀬は、心理療法過程に登場する動物の治療的意味について①クライアント（CI）の自己存在感の確かめ（自己像、分身）②CIの成長の助け③家族関係の改善④治療進展の触媒の4つを挙げている。これをユング心理学の観点からみると、①②は個性化の過程における内的・主観的な統合の過程、③

④は同過程における客観的関係の過程に関係するといえる。村瀬の考えも踏まえると、動物に対してこうした不思議な意味を感じるとき、それは個性化の過程における重要なとき（カイロス）を迎えたときである。

### 【事例1】女子、15歳、登校拒否、家庭内暴力

CIはいじめにあったことで不登校になり、焦りや憤りから母親に暴力をふるっていた。血統書付きの猫を要求し、「私の心を知って…」の意味をかけて「心」という名前を付けた。猫と一緒にでの来談を条件に、CIは来所する。入室するや否や逃げ出した猫を、CIと母親、治療者の3人で探し回り、発見した後、治療者は猫を膝に乗せ、CI・母親と話始めたところ、母親が想像もしていなかったCIの寂しい気持ちが語られた。やがて登校再開し、母親への思いも程よい距離を帯びたものになる。

村瀬によれば、ここでの猫は①と④の意味を持っていたという。ユング心理学的には、「ペルソナ」と葛藤し、不登校・家庭内暴力をする「とき」を迎えていたCIにとって、猫はもはや自分の心を理解する唯一の重要他者として存在していたと思われる。これは心理療法過程における治療者と患者の関係性にも似ている。また、自分の分身である猫を、母と治療者が探すという共有体験を通じて、猫以外の他者に信頼感を感じるきっかけとなったといえる。ここで、無意識側に抑圧してきた甘える気持ちなどを打ち明けることで、今まで生きられなかった反面を自我に統合するというCIの意識と無意識の折り合い、さらに母との心の距離を縮める「関係性の回復」に関連する役割を猫が果たしたと見ることができる。

## 結論

本論文における検討を通じて、精神的困難を抱える人間にとって、動物はたましいの顕現、自己像などの内的な像としてだけでなく、一方で外的世界における重要他者、さらには周りの人間との関係を作る入り口という意味を持つことが明らかになった。つまり動物は、個性化の過程に関わり、人間の全体性の回復に寄与しうるのである。

今回の研究では、一般的にはコンパニオン・アニマルとみなされないペット（亀やトカゲなど）が人間の全体性を回復しうるのかといった問題については扱えなかった。今後さらに検討していく必要がある。

## 主な参考文献

- 河合隼雄、『ユング心理学入門』、培風館、1967
- 河合隼雄、『猫だましい』、新潮社、2002
- 村瀬嘉代子、『心理療法と自然-その2、心理療法過程に登場する動物の治療的意味』、カウンセリング研究紀要 No.10
- 森省二、『カエルの無意識 ネコの知恵 メルヘンを読む』、筑摩書房、1997
- 森裕司・奥野卓司編著、『ヒトと動物の関係学 第3巻 ペットと社会』、岩波書店、2008

本要旨は、『2021年度 静岡大学人文社会科学部社会学科 卒業論文要旨集』第18号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。